

## 第2節 ベトナム焼締陶器の分類と製作技法

菊池 誠一・阿部 百里子

ホイアン旧市街地での発掘調査の結果、ベトナム産の無釉焼締陶器（以下、焼締陶と呼ぶ）と土器が多量に出土した。とりわけ、ディン・カムフォー地点の溝状遺構と川跡から17世紀代の各種のベトナム焼締陶と土器が出土している。これらの資料は、当時の食器様相や生活様式をさぐるうえで貴重なものである。本節では、多量に出土した17世紀代の焼締陶と土器を形態と文様を参考に分類し、その用途をさぐる。また、その製作技法についてフエ・ミーヌエン窯跡資料や民俗資料を参考に考察するものである。

なお、焼締陶・土器の分類、用途については菊池が、製作技法については阿部が執筆した。

### 1 ベトナム焼締陶器・土器の分類

分類にあたっては、形態と文様を参考におこなった。この分類は暫定的なものであることをおことわりしておきたい。

**長胴瓶：** 胴長の筒形容器で、内面に製作時のロクロ目が顕著にのこる。長胴瓶・長胴壺とよばれるものである。口縁部形態や文様、胎土によって大きく5つに分類できる。

**I 類** 平底から直立気味に立ちあがり、短く直立する頸部をもつ。口縁部に2本の沈線と肩部に沈線をほどこす。口縁端部はやや内傾し、“て字”状を呈する。大きさによって2つに細分できる。

— A 大形の容器で、口径が13cm以上のものである。出土量は少ない。

— B I類Aよりも小形の容器で、口径が10～12cmのものである。口縁端部の形状がそれぞれ微妙に異なるが、出土遺構の年代から考えれば、これは時期差ではなく、窯・工人の技法差の範疇でとらえられるものであろう。

**II 類** ややあげ底の底部から胴部がふくらみ、ほぼ直立した頸部をもつ。口縁部に沈線がなく、口縁端部は“て字”状を呈し、肩部に波状文と平行沈線文や凸帯がほどこされる。器壁がたいへん薄く、焼成がよい。3つに細分できる。

— A 肩部に波状文や平行沈線文をほどこす。

— B 肩部に波状文と平行沈線文のほかに、凸帯がある。出土量は少ない。

— C やや内傾する頸部で、口縁端部が少し突きあがるような形状である。A・Bと比べると器壁がやや厚い。出土量は少ない。

- Ⅲ類 口縁部に沈線があり、肩部に波状文と平行沈線文がある。Ⅰ類とⅡ類の合体である。出土量は少ない。
- Ⅳ類 長く直立した頸部、あるいはやや外反した頸部である。口縁端部は、“玉縁”状に肥厚させる。文様によって2つに細分できる。出土量はたいへん少ない。
- A 頸部がやや外反する。肩部に沈線と茶の湯の世界で“繩簾”とよばれる文様がある。北部ベトナム産である。
- B ほぼ直立する頸部である。肩部に波状文と平行沈線文があり、4個の横耳がつく。北部の影響を受けたものと考えられる。
- Ⅴ類 胴部のみ出土のため、口縁部形状がはっきりとしないが、各類の胎土とはっきりと異なるもの。胎土は淡く粉っぽい感じである。出土量はたいへん少ない。北部ベトナム産とおもわれる。
- Ⅵ類 口縁部に沈線がなく、口縁端部を横に少し引きだしたような作りである。頸部の内面が内湾している。各類の長胴瓶の胎土と違い、砂粒を多く含むものがある。出土量はたいへん少ない。
- Ⅶ類 上記以外の長胴瓶とおもわれるもの一括する。すべて1点のみの出土である。そのなかで、3は遺構外からの出土であり、Ⅲ類の変化したものと考えられ、時期的には新しくなる。また、1は広口壺と考えたほうがよいかもしれない。
- 鉢 : ややあげ底気味の底部から湾曲して立ちあがり、口縁部が“くの字”状、“T字”状である。胎土に多量の白色砂粒を含む。大きさや文様から5つに細分できる。
- Ⅰ類 大形の容器で、口径が26cm以上のものである。線条文がほどこされる。
- A 胴部があまり張らない。
- B 胴部が張り、口縁端部がAよりも厚い。
- Ⅱ類 中形の容器で、口径が約18～23cmのものである。最大径の位置によって3つに細分されるが、これは時期差とは考えられない。条線がほどこされ、出土量が多い。
- A 口縁部に最大径がある。
- B 胴部に最大径がある。
- C 底部付近に最大径がある。
- Ⅲ類 胴部に条線がなく無文で、口径が約22～26cmのやや大形のものである。口縁端部の作りと最大径の位置によって2つに細分される。
- A 形態はⅠ類Aに対応するが、無文である。
- B 形態はⅠ類Bに対応するが、無文である。
- Ⅳ類 小形のもので、口径が約15cmのものである。口縁部は“くの字”状を呈する。胴部に条線ではなく、無文あるいは沈線がある。
- Ⅴ類 胴部に波状文をほどこす。出土量はたいへん少ない。

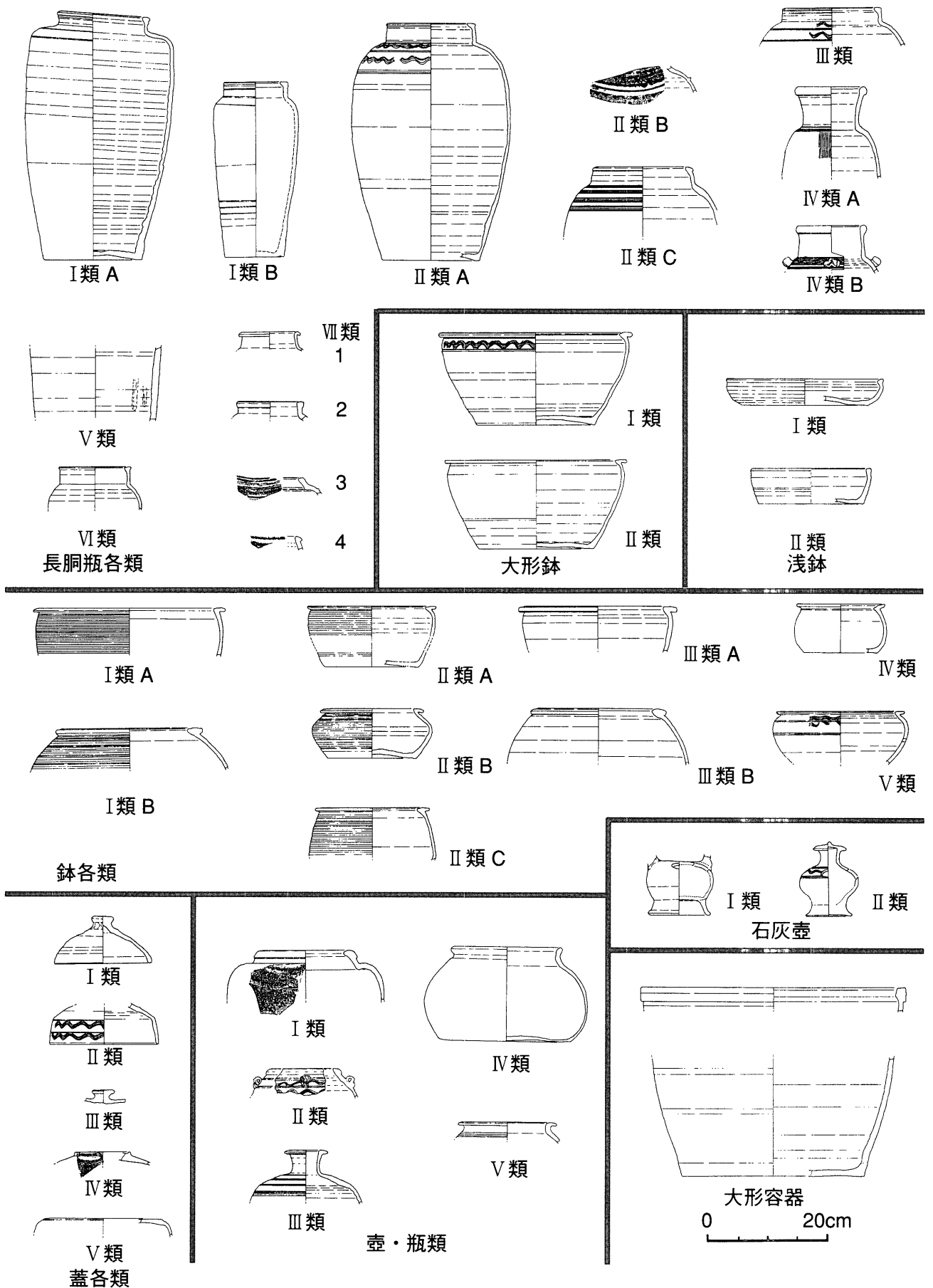


図88 焼締陶器・土器の分類

- 浅鉢** : 器高が低く、ややあげ底の底部から外反する。胎土は精緻である。口縁部の作りと器高によって2つに細分できる。
- I類 器高が低く、口縁部で屈曲する。胎土は精緻で、焼成はよい。
- II類 I類に比べて器高があり、口縁部の作りも違う。
- 大形鉢** : ややあげ底の底部からゆるやかに立ちあがり、口縁端部が“T字”状、あるいは“くの字”状を呈し、最大径が口縁部にある。口径は30cm前後である。胎土が精緻で、器壁は薄く、焼成は良い。2つに細分される。
- I類 波状文、平行沈線文がある。波状文が1段のものと2段のものがある。
- II類 無文である。出土量は少ない。
- 蓋** : 形態によって5つに細分される。
- I類 つまみ部をもつ山形の蓋である。胎土に白色砂粒を多く含む。大きさの相違がある。
- II類 逆高台形のつまみ部で、胴部が台形状の蓋である。胎土は精緻である。出土量は少ない。図示したものは、つまみ部を欠損している。
- III類 ボタン状のつまみ部のある蓋である。1点のみの出土である。
- IV類 幅広の浅いつまみ部をもつ。沈線による幾何学文がほどこされる。出土量はたいへん少ない。
- V類 平坦な天井部をもち、波状文がほどこされる。つまみ部があった可能性がある。出土量は少ない。
- 壺・瓶** : 壺・瓶類である。
- I類 頸部が短く内傾し、口縁端部が肥厚する。肩部にゆるやかな波状文をほどこし、胎土に少量の白色砂粒を含む。出土量はたいへん少ない。
- II類 内傾する頸部の四耳壺である。肩部に凸帯と波状文をほどこし、縦耳をつける。1点のみの出土である。これは遺構外からの出土であり、時期的に新しくなると思われる。
- III類 頸部がすぼまり、肩部に沈線をほどこす。糸切り底である。出土量は少ない。
- IV類 広口壺である。出土量は少ない。
- V類 広口壺で胴部に条線がある。1点のみの出土である。
- 石灰壺** : 石灰入れ容器である。ベトナムではおもに女性がピンロウジの実をキンマの葉でくるみ噛むが、この時に石灰を混ぜる。この石灰入れ容器である。
- I類 把手があるもの。このタイプは北部ベトナムの伝統的な形態である。
- II類 把手のないもの。このタイプはおもに中部で生産されていた。
- 大形容器** : 平底の底部からゆるやかに立ちあがる。器壁は厚い。口縁部形態に台形のものがある。

以上が形態と文様などを参考にして分類したものである。17世紀代よりも時代が新しくなるが、ホイアンではこの他に調理具である七厘や石臼なども出土している。

## 2 ベトナム焼締陶器・土器の用途

上述した焼締陶器・土器の用途は、その形態や器面に付着したスス、炭化物の状況、また現在のベトナム民俗例などから用途を推定することができる。

長胴瓶、あるいは長胴壺とよばれる長胴瓶Ⅰ類からⅦ類は、貯蔵具であろう。筆者の聞き取り調査では、この種の長胴の筒型容器（口縁部の形態が若干違う）は米や調味料の貯蔵として利用され、また現在でも使用されている。ファン・ダイ・ゾアン（Phan Dai Doan、ハノイ国家大学教授）氏によると、中部ベトナムでは製糖業の発展にともなって各種の容器がつくられたという<sup>1)</sup>。ホイアン出土の長胴瓶は、砂糖壺としても利用されていた可能性がある。

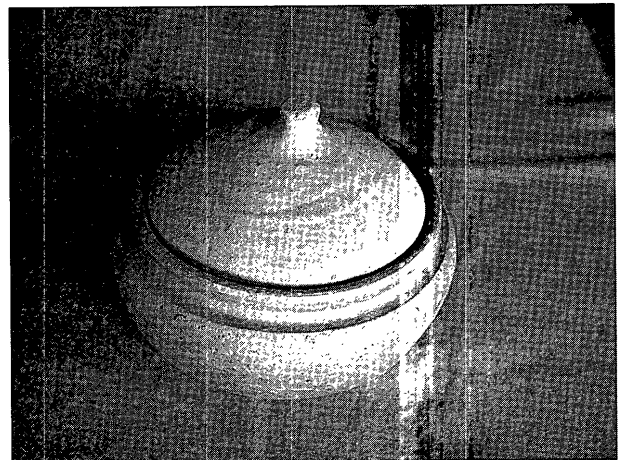
1) ファン・ダイ・ゾアン 1993  
「ホイアンとダンジョン」『海のシルクロードとベトナム』315  
頁、穂高書店

鉢Ⅰ類は煮炊具か貯蔵具であろう。同Ⅱ類は胴部に付着したススや炭化物から煮炊具であろう。このタイプの容器が現在も北部や中部ベトナム地域で生産されている。ただし、胴部の線条文はない。ホイアン近郊のタインハーでも生産されており、これは炊飯や魚料理に使用するものである。このⅡ類とセットをなすが、蓋Ⅰ類である。この蓋と同形の蓋が、現在でも北部や中部で生産され（写真a）、鉢とセットで売られている（写真b）。鉢Ⅲ類、Ⅳ類も煮炊具であろう。同Ⅴ類は不明である。

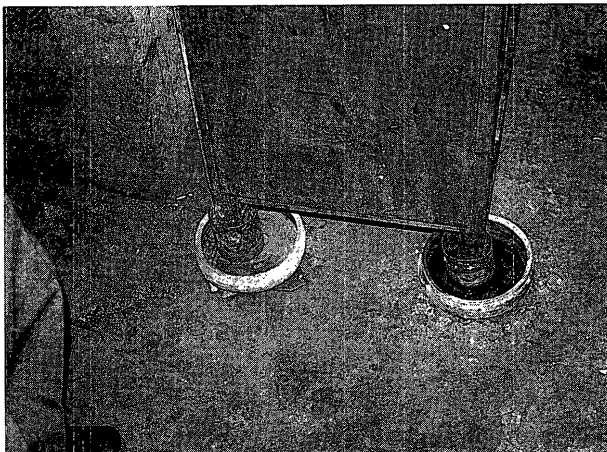
浅鉢Ⅰ類は盛付具であろう。ただし、蓋としても利用が可能である。ハティン



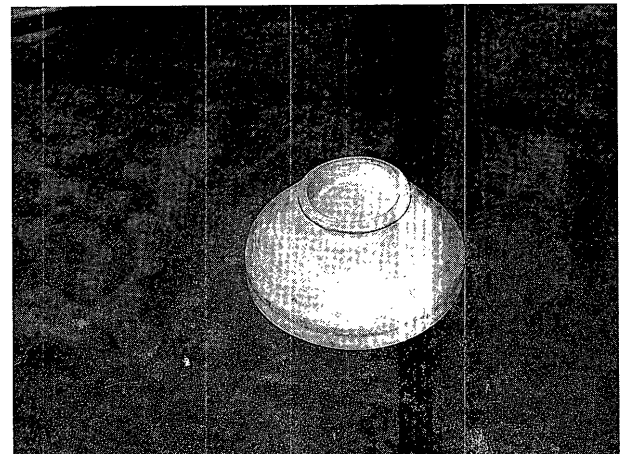
a



b



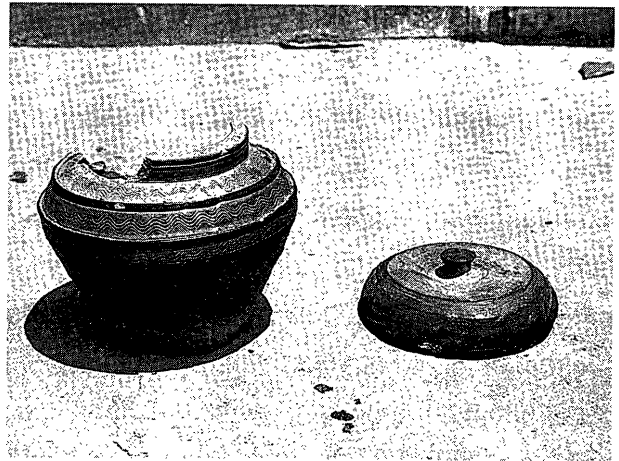
c



d



e



f



g

(Ha Tinh) 省の民俗例では、このタイプの容器が豚の餌入れとして使用されていた。同Ⅱ類は盛付具の可能性もある。ただし、この形態はフエ・ミーヌエン窯跡やクアンビン省ミークオン窯跡では、窯道具の焼台やサヤとして使用されている（写真図版23）。また、民俗例では食器棚の脚に置き、水を入れ蟻除けにしている例がある（写真c）。ホイアンではわずか1点の出土であり、窯道具の転用と考えられる。

大形鉢Ⅰ・Ⅱ類は、ともに食器洗いの容器である。現在でもホイアン近郊のタインハーでは、このタイプのものを

食器洗い容器として生産している。

蓋Ⅱ類は蓋として使用するほかに、逆に使用すると高杯形となり、飲食器として使用していた可能性もある。このタイプのものはタインハーでは生産していないが、北部ハティン省のギスファン (Nghi Xuan) 県のコダム (Co Dam) 村でこのタイプの土器を生産している（写真d）。筆者の聞き取りでは水飲みのコップとして生産しているという。同Ⅲ類は蓋として使用し、同Ⅳ類はどのような容器の蓋なのかよくわからない。同Ⅴ類は大形容器の蓋として使用されたのであろう。

壺・瓶Ⅰ類は貯蔵具であろう。同Ⅱ類は水甕の可能性もある。この種の容器が最近までフエのフックテック (Phuoc Tich) で生産されており、水甕として使用している例が多い。また、ホイアンの民家でも水甕として使用している例がみられる（写真e）。この種の容器は16～17世紀のフエ・ミーヌエン窯跡で出土しており、そこには大小の形態差がある。また、ホイアンのトゥボン川南岸のチュオンフォン地区のタインルオン (Thanh Luong、清涼) 寺所蔵のこのタイプの小型容器は、蔵骨器として使用されていたものである（写真f）。大形のもの水甕であり、それよりも小形のものは他の用途に使用されていたのであろう。同Ⅲ類は頸部がくびれているため、液体容器の可能性があろう。同Ⅳ類はススが付着しているため、煮炊具の可能性もある。同Ⅴ類は貯蔵具であろう。

石灰壺Ⅰ・Ⅱ類は、おもに女性がピンロウジの実をキンマの葉でくるみ噛む時

に石灰を混ぜるが、その石灰入れの容器である。Ⅰ類は北部で一般的にみかける形態である。Ⅱ類はクアンチ省フックリー窯跡とフエ・ミーヌエン窯跡で出土している（写真g）。中部産の形態的特徴と考えられる。

大形容器類は一般的に貯蔵具としての用途が考えられる。

以上である。遺物の観察や民俗例を参考に用途を推定したが、不明なものもあり、資料の増加をまって再検討したい。

（菊池誠一）

### 3 ベトナム焼締陶器の製作技法

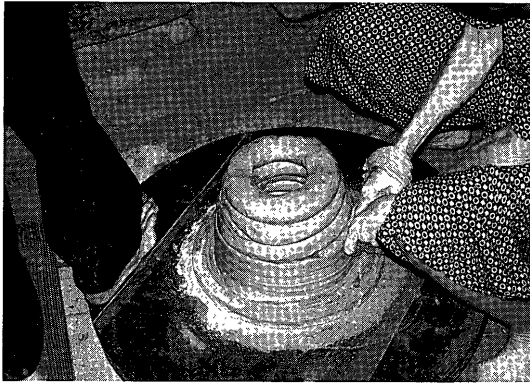
焼締陶は高光度で焼成された無釉の陶器である。その形態や文様・胎土などの特徴によりいくつかに分類できるのは前述したとおりだが、製作技法の点からも様々な特徴がみられる。ここでは焼締陶の主要器種である瓶・壺・大形鉢・浅鉢といった容器の製作技法についてその特徴を紹介し、さらに16～17世紀に焼締陶を生産していたトゥアティエン・フエ省ミーヌエン・フックティック窯跡群出土資料や現在でも土器生産をおこなっているホイアン市郊外のタインハー土器作り村の民俗事例を援用してその製作技法を考えてみる。

#### 胎土

焼締陶の胎土はきめが細かく光沢がある。精良で緻密だが、砂粒や径1～2mm程の赤色粒子・黒色粒子が含まれるものもある。これらの粒子が初めから粘土に含まれていたのか、製品を製作する過程で混入したのかは不明である。胎土の色調は褐色・褐灰色・赤灰色・灰色などであるが、赤褐色と灰色あるいは青灰色と灰色など、2色の層状（縞状ともよぶ）もしくはマーブル（墨流し）状を呈するものも多く見られる（写真図版23-8）。ベトナム北部フーランでは、マーブル状の粘土を良くこねて均質な素地として使用している。よって焼締陶にみられるマーブル状を呈する胎土はこのようなマーブル状の粘土、もしくは成分の異なる2種類以上の粘土をよく混ぜないまま使用していた可能性がある。また、焼締陶によく見られる焼き膨れは、粘土をこねる段階で菊練りのような空気を抜きながらよく混ぜるといふ工程があまり行われていなかったため生じたと推測される。このことは胎土が縞状もしくはマーブル状を呈する理由と合致するのではないだろうか。

#### 成形

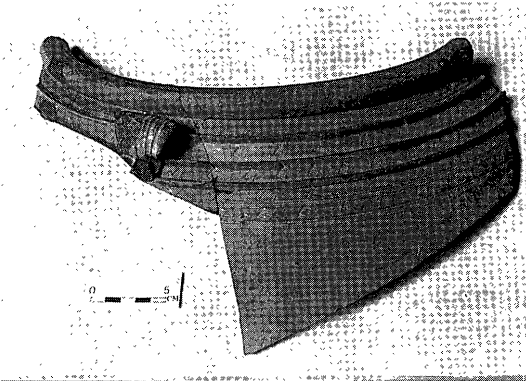
焼締陶はロクロを用いて成形されている。器壁の断面には底部の粘土板と、その上に積み上げもしくは巻き上げた粘土紐との合わせ目や、粘土紐どうしの合わせ目が見られる（写真図版23-7）。製品内面には蛇腹状に深いロクロ目がのこり、このロクロ目から、回転方向が判明するものに関してはロクロはすべて右回転（時計回り）である（写真図版23-11）。ロクロ目の状態から、工具を使用して粘土を引きあげたものと指のみで引きあげたものがあるようである。底部には成形時についたと思われる指頭痕や離材と思われる粉殻や灰の痕跡を確認できるが、壺・瓶Ⅲ類については回転糸切り痕が残る（写真図版23-10）。浅鉢については底部を



h



i



j

1) 菊池誠一・阿部百里子 1998  
「ベトナム中部のホイアン・タ  
インハーの土器づくり」『古代  
学研究』第142号、23-33頁

回転斡削りしている。また、大形鉢や瓶のなかにはロクロ成形のあと指などで調整をしている製品もみられる。

現在の土器作りの民俗事例をとってみると、ホイアン近郊のタインハー地区ではロクロの回転台に円形の粘土板を叩いて固定し、この上に粘土紐を巻き上げてからロクロの回転を用いて成形している（写真h）<sup>1)</sup>。このとき、粘土を指で引きあげており、内面にはロクロ目が残っていた（写真i）。ロクロの

回転方向は右回転で、これはベトナム中部クエンガイ省のミーティエンやトゥアティエン・フエ省のフックティク、北部ハバック省のフーラン、ハノイ郊外のバッチャンでも同様である。右回転のロクロはベトナム人によるロクロを用いた土器作りに広く見られる技術のようである。また、製品をロクロからはずしやうように、粘土板をロクロに固定する際、ロクロの回転台の上に砂もしくは灰をまいている。小形の製品については粘土塊から水挽きで成形しており、製品をはずすときは回転糸切りをする。こうした民俗事例と出土焼締陶器の間には製作技術の面で様々な共通点が見いだされる。

### 施文

文様としては長胴瓶Ⅱ類A・B、Ⅲ類、Ⅳ類Bの肩部や大形鉢Ⅰ類、壺・瓶Ⅰ類、Ⅱ類に波状文が見られる。長胴瓶Ⅱ類Cや壺・瓶Ⅲ類等には平行沈線文が見られる。これらはともに数本の単位の櫛歯状工具を用いて施文していると思われる。文様同士の前後関係については、沈線と波状文の切り合い関係から波状文は沈線文が引かれた後に施されていることがわかる。また、長胴瓶Ⅱ類B、壺・瓶Ⅱ類に見られる凸帯や長胴瓶Ⅳ類Bに見られる横耳、壺・瓶Ⅱ類に見られる縦耳も、ほとんどの場合沈線文や波状文が施されたあと貼付られている。よって沈線文→波状文→凸帯・耳という工程が想定される。ただし、図75-49やホイアン・チャンフー48番出土資料（写真j）は、凸帯が張付られたあと、波状文が施されている。よって沈線文→凸帯→縦耳・波状文という工程が想定される。これらの工程と生産の関係については今後資料の増加を待って検討を深めたい。これまでに調査されてきたベトナムにおける土器作りでは施文のための工具には金属器を使用しておらず、専ら竹や木製品を用いている。タインハー地区では沈線を施すの



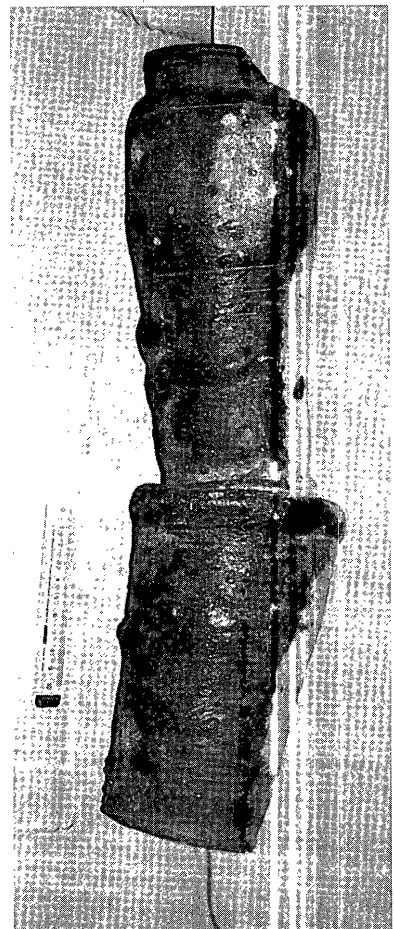
に指の爪を用いている。このことは17世紀代の土器作りを考えるうえで参考となろう。

### 焼成

最後に焼締陶の焼成技法についても考えておく。ホイアンから出土する焼締陶の生産地のひとつにミースェン窯跡群がある。ここからは当時の窯詰め技法を物語る資料が出土している。例えば長胴瓶の口縁部に鉢状のサヤをうつぶせにかぶせ、その上に別の長胴瓶を積み上げた状態で熔着したもの（写真図版23-3・4）や、長胴瓶の上に直接他の長胴瓶を積み上げた状態で熔着したもの（写真図版23-5、写真k）などである。これらの製品は口縁部や肩部、底部で他の製品が熔着していることになる。また、サヤ等で蓋をされた部分である口縁部もしくは肩部から内面側にかけては灰白を呈していた。サヤは蓋として使用する以外に（写真図版23-6）のように小形製品の窯詰めにも使われており、さらには消費地である日本の長崎などの遺跡からも出土しているため、窯道具以外にも使用されていたと考えられる。ただし、現段階では窯道具以外の用途は不明である。

実際の出土遺物についてみると、焼締陶の器壁表面は、ほとんどのものが口縁部もしくは外側面肩部を境に大きく色調が変化する（写真図版23-2）。また、この色調の境界部には他の製品が熔着した痕跡が巡っているものもある（写真図版23-1）。同様な痕跡は外側面底部の端から数cmのところでもみられ、さらにこの部分が円形にへこむものもみられる（写真図版23-9）。これらの痕跡は製品を窯詰めする時、製品同士を直接重ねて積み上げていったためか、もしくは口縁部から肩部にかけて窯道具である鉢状のサヤをかぶせて製品を積み上げていったことによると考えられよう。色調の変化部を境に内面側は灰色や赤灰色、外面側は黒褐色、赤褐色、灰褐色、にぶい赤褐色を呈しており直接炎が当たる部分と、そうでない部分で、大きく色調が異なる。特に外側面側肩部～胴部にはべったりと自然釉が付着しているものがある。自然釉の色調は、外面は灰黄色や黄褐色で窯内は酸化の雰囲気であったと思われる。これに対し内面は暗オリーブ灰色を呈するものがある。

以上、焼締陶の特徴や製作技法について考えてみた。焼締陶に共通した技術としては成形にロクロを用いていることやその回転方向が右であることが上げられる。この他にも、縞状もしくはマーブル状を呈する胎土や製品の成形・施文方法、焼成時の窯詰めの方法などに共通点が見られるものがある。これらの特徴と生産に関する問題、さらには北部ベトナムと中部ベトナムでの焼締陶の製作における諸問題については、今後調査地域の拡大や資料の増加をまって考察を深めたい。またベトナム各地で現在でも行われている伝統的土器作り村についても継続して調査してゆきたい。（阿部百里子）



k